

子どもの身体拘束に対する保護者の思い

Emotions of the parents about physical restraint on child patients

西3階病棟 ○井上真理 菅野貴美 上田美穂 宮内美和 小野明子

要旨：広汎性発達障害では社会的相互関係、コミュニケーション、想像力の障害という特徴がある。これらの特徴から患者は執拗な拘り・不安・抑うつ・攻撃的行動・パニックなど重度の行動障害を生じ、生活が破綻しているものがほとんどである。そのため入院治療には身体拘束が必要とされることが多い。厳しい治療に耐える患者への看護はもちろんであるが、保護者である両親・祖父母への看護について振り返る機会があまりなかったため今回研究に取り組んだ。研究によって得られた貴重な意見から今後に生かすことのできる看護について学ぶことができたため報告する。

キーワード：身体拘束、広汎性発達障害、保護者（親）

I. はじめに

子どものこころ診療部（18歳未満）がある当科では、広汎性発達障害に起因する2次的障害（自傷行為・脅迫性障害・引きこもりなど）をもつ患者を見る機会が多い。これらの患者は日常生活に大きな影響を及ぼしているケースが多く、入院治療では破綻した生活の建て直しや生活の保障が大きな目的となってくる。当病棟ではその治療過程において、これらの子供に対し身体拘束を行うことがある。これまで私達が経験した子供への身体拘束について振り返る中で、身体拘束の説明を受けたとき、実際に拘束されている姿を見たときの保護者の思いを知ることで、患者だけではなく親・家族への看護を見直す機会となればと思い調査を行った。

II. 研究方法

1、対象：子供のこころ診療部の入院治療が開始された平成17年以降に当病棟に入院し、治療上身体拘束（胴・四肢）を行った患者の保護者のうち本調査に同意を得られた4家族。

調査時対象の子供は退院しており外来通院中。

2、研究方法：聞き取り調査、質問紙調査

3、研究期間：平成21年9月～平成22年1月

4、データ収集方法：面接と無記名式の質問紙

- 5、データ分析方法：「身体拘束」「看護師の対応」についての思いをカテゴリー化
- 6、用語の定義：身体拘束・・・体幹・四肢を専用の帯を用いて固定し、身体の動きを制限すること。
- 7、倫理的配慮：本研究は当院倫理委員会の承認を得ている。対象には調査の目的や質問内容を紙面にて説明し同意を得た。調査への参加は自由意志であり、いつでも辞退できること、辞退されても不利益はないことを説明。個人が特定されないよう配慮し、調査で得られた内容によって今後の治療に差し支えることはない。調査で得たデータは研究終了後に速やかに破棄をする。

Ⅲ. 研究結果

《身体拘束について》

「言葉に表せないほど辛い」「子供に申し訳ない」「健康の不安もあり限界だった」「仕方ない」「精神的なダメージが不安」「不安が強くなるのではないか」との意見があった。健康状態が限界、生活が成り立たない現状があり、治療の必要性は理解しているものの、厳しい治療ということもあり保護者としての迷い・葛藤がみられた。

1、身体拘束についてどのような説明を受けましたか

信頼感に基づく抑制が必要でこの治療により軽快した例がある
治療をスムーズに行うために必要なこと
年齢的に時間と治療資源をかけられる最後のチャンス

2、身体拘束についての説明を受けたときの気持ち

できることなら拘束されることなく治療がすすめばいい
拘束をされるのはショックだが仕方ない
入院して不安なうえ、さらに不安が強くなるのではないか
精神的なダメージを受けないか心配という反面、健康の不安すら感じる限界的状況だった
愕然としショックだった

3、身体拘束をしているお子様を見たときの気持ち

本当に辛い、悔恨、悲観、理不尽、いろんな思いがわいてきた
悲痛な思い
入院させても虐待しているような気持ち、入院させなくても親の怠慢の虐待のような気持ち

言葉では言い表せない程ショック

子供に対して本当に申し訳ない気持ち

《看護について》

「拘束されている姿を見て辛かった」「忙しそう、どのスタッフに声をかけていいのかわからない」

「清潔面の配慮にかけていた」「部屋が殺風景」「景色が見えず残念」との意見があった。

保護者との連絡ノートを実施したケースについては「本人の様子がよく理解でき安心できた」といった肯定的な意見が多かった。

1、面会時の看護

子育ての経験のある方は親身に接して下さった

笑顔で迎えて下さってよかった

忙しそうにされていると声をかけづらい

優しく明るく話しかけて下さってとっても嬉しかった

2、面会時間について

仕事など事情を理解して下さっていたので良かった

今の状態にさせた親のことをどう思っているのか考えるとわべだけの言葉になるきがした。

だから最初の頃は面会時間が少なくてよかった

親にいろいろ要求してしまうので、最初の頃は面会時間が少なくてよかった

病状にもよると思うが時間を決めていただいでよかった

3、面会時の拘束について

正直辛かった

4、洗濯物の取り扱いについて

人によってばらつきがあった

5、患者の近況報告について

もう少し細かに伝えてほしかった

連絡ノートのおかげで本人の様子がよく理解でき安心できた
ノートに先生や看護師さんが書いていただいたことが嬉しかった
誰に話しかけていいのかわからないので声を掛けてもらえるとうれしい

6、身の回りの生活援助について

よく関わっていただいて感謝
表を病室に張っていただいたりしてよかった
拘束中の清潔援助がやや配慮に欠けていた

7、室内の環境について

景色が見えないのが残念
子供がいる場所にしては殺風景だった

8、その他

ノートに質問や自分たちの思いも書けたのでありがたかった
バースデーカードやメッセージを頂いて嬉しかった
拘束中の子供にもっと楽な姿勢をさせてやり、苦痛の緩和やさっぱりするようにしてあげたか
ったし、抱きしめてあげたかった
規則的なことにとらわれず、患者の家族の身について自分を置き換え心のある看護をしてほし
い
退院してからノートを読み返すと以前の様子がわかり、現在と比較し改善を感じることができ
る

IV. 考察

拘束という最も厳しい治療環境により、全ての生活を制限され、自分では何もできない状態の子供
を目の前にした時の保護者の思いは計り知れない。看護者は患者中心に考えがちであり、家族の状
況や立場を十分に考慮していないことがある。環境面での指摘もあったように、限られた面会の時
間内で保護者の満足感や安心感につながる配慮も求められている。保護者との連絡ノートを実施し
たケースについては肯定的な意見が多く、保護者とのコミュニケーションや信頼関係を築くための
要素の一つになりうると考える。

保護者は子供の治療と、身体拘束という非日常的体験により精神的な苦痛や葛藤を生じている。これらの思いを理解し、さらに前向きな意識に好転するための看護介入が必要である。

V. まとめ

子供の治療においては、家族の状況や立場に共感し理解することが重要である。厳しい治療だからこそ患者・家族・医療スタッフが協力し信頼関係を築いた上で取り組んでいく必要がある。

VI. 参考文献

坂田三充： 子どもの精神看護， 精神看護エクスペール， 中山書店， 2005年

堀江まゆみ： 発達障害のある人の診療ハンドブック， 2008年

野嶋佐由実： 精神看護学， 日本看護協会， 2002年